



# 新潟の水辺だより

Vol.46

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1998年11月2日 Vol.46

## 8.4新潟水害特集

### 8.4新潟水害に思う

大熊 孝

この8月4日の新潟豪雨は、1886年の観測開始以来最高の時間雨量97ミリを記録し、水都新潟が水に弱いことを再認識させた。

この水害の原因や対策に関して、さまざまな意見や陳情がマスコミを賑わしている。

私の調査はまだ不十分であるが、この紙上を借りて、新潟市内の水害に関する見解を述べておきたい。これが、今後対策を立てる上で少しでも参考になれば幸いである。

◇今回の水害に直面してまず感じたことは、時間百ミリにも達する記録的な豪雨の割には、被害が小さいということであった。新潟市内の浸水被害は床上1531戸、床下7886戸であるが、同じ50万都市の鹿児島市の1993年8月6日災害(死者48人、全半壊465戸、床上7983戸、床下2506戸)と比較して、かなり小さいといえる。それは、地形・地質条件の違いが大きいが、それなりの対策が施されていたからであるといつて過言でない。また、浸水被害も降った雨がほぼそのまま湛水したもので、土砂を含んでいないことが幸いした。(河川氾濫の浸水の場合は、土砂が大量に残され、その処理に難渋するのが常である)。

ただ、今回浸水した場所はほとんどがいわゆる0メートル地帯であり、天然ガス採取による地盤沈下のツケを支払わされた結果となった。仮に、この地盤沈下がなければ、浸水家屋はほとんどなかったものと思われる。その意味では、今回の災害は人災であったといえる。だが、「覆水盆に返らず」であり、新潟市の大部分はオランダと変わらない海面下にあることを市民1人ひとりが認識して対処する必要がある。

◇この水害を経験して、「2度と水害を起こさない対策をして欲しい」とか、極端な場合「水害原因となった通船川は埋め立てて欲しい」といった意見や陳情

が報道や調査の中で見聞された。今回のような豪雨に対して、「果たして水害を皆無にできるのか?」、通船川を例に考えてみたい。

通船川の集水面積は約16.85平方キロメートルである。ここに1時間97ミリ、20時間で266ミリの雨が降った。この水が海に自然流下できればよいのであるが、日本海の潮位は標高0.5メートル強であり、0メートル地帯に集まってきた水はポンプで汲み上げる以外にない。通船川には、山の下排水機場(信濃川側)と津島屋排水機場(阿賀野川側)に合計毎秒26.5立方メートルのポンプが設けられているが、この能力を集水面積に対して雨量換算すると1時間当たり5.7ミリでしかない。雨量に対してポンプ能力が小さ過ぎるわけで、この増強が図られるべきだと考えるが、どこまでポンプに頼ればよいのかが問題になる。仮に、この時間雨量97ミリの水を全部ポンプで吐き出すとすると、毎秒454立方メートルのポンプ能力が必要になる。

その建設費は、導水路を含めて、軽く1,000億円を超えることであろう。

ポンプ能力が追い付かない分は、一旦どこかに貯留して、ゆっくり排出させる以外にない。今回、通船川と栗の木川、および2つの貯木場の水面に貯留された水量は約百万立方メートルであり、雨量に換算すると約60ミリに相当した。仮に、通船川などが埋め立てられていたら、浸水家屋がもっと増えたことは疑いない。海面下の地域では、遊水池となり得る水面を可能ながざり残しておくことが重要である。

今回の通船川の最高水位は標高0メートルで、それ以下の地域に浸水被害を出したが、被害がでない程度の貯留能力は約70万立方メートルである。これを雨量換算すると約42ミリである。したがって、時間当たりで97ミリからポンプの5.7ミリと貯留の42ミリを引いて、残りの約50ミリ分を新たなポンプで排出

(次項につづく)

したら、浸水家屋を無くすことは可能である。だが、仮に50ミリ分を1時間で排出するとしたら毎秒約234立方メートルのポンプが必要になり、この建設費も膨大なものになる。

現状のポンプ能力は小さく、その能力アップは必要と考えるが、財政面と自然保護にも配慮して、その規模は適度に押え、私としては、今後家屋を防水化したり、高床式に替えていくことを薦めたい。高床式等は個人負担が多くなるから、行政から補助金を出す制度の設置を提案したい。通船川流域で床上浸水した家屋は637戸であるから、仮に1戸当り3百万円の補助金を出し全て高床式にしたとしても、約20億円の費用でしかないからである。こうした対策は、個人に税金が投入されるわけで、被害に遭っていない者から見れば不公平に感じるかも知れないが、大きなポンプ場に何百億円も掛けるより、ずっと税金の節約になる。政策課題として、これを是非議論して欲しいところである。

◇以上の議論は、鳥屋野濁や西川流域にも大筋で当てはまる。ただ、大堀幹線筋には遊水池の余地がなく、砂丘地帯の開発で雨水が集まりやすくなっている分、条件が悪いといえる。砂丘地帯では、透水性舗装や各戸貯留が進められるべきであり、各戸貯留にも補助金制度を提案したい。

最後に、今回、自動車の被害が目立ったが、水害時には自動車を使用してはならないことを注意しておきたい。自動車は電気系統が浸水に弱く、被害額は意外と高くなるとともに、放置されると周辺被害を助長するからである。

文明社会といえども、災害時はいわば原始の状態に放り出されるわけである。自分の命と財産はまず自分で守ることが肝要である。

(新潟大学工学部教授・河川工学)

## 雨水タンク

8月4日午前2時頃から降り始めた雨が午前11時頃には185ミリに達した新津市(程島地内消防本部調べ)では、床上浸水が148世帯、床下浸水が632世帯という被害になった。昭和53年の「6・26水害」までは、能代川(現新津川)の溢水が大きな被害をもたらしていたが、能代川分流の暫定通水で解消されてきている。



雨水タンク1:手押しポンプの下に2-のタンク

今回の水害は市街地の排水や雨水ポンプ場の能力を上回る降雨による都市型水害といえる。

雨の恵みを家族で享受したいと、2年前から自宅の車庫と母屋の屋根に降る雨を集め、地下タンクなどに貯留してトイレの洗浄水や散水に利用している(水辺だよりVol.39参照)。雨を貯留することは雨水の流出を抑制し都市型水害を防ぐ一助になると思われる。市街地における雨水対策としては、排水路や雨水貯留施設を組み合わせた総合的な水環境の整備が必要と思う。具体的には公共下水道で不要になった浄化槽の活用が考えられる。



雨水タンク2:雨樋から雨水を貯める250リットルのタンク

長井 一義(勤務先:新津市水道局)  
e-mail:kazn@alles.or.jp

## 「天災は忘れた頃にやってくる」

8月4日前夜からの雨は勢いを増し、午前3時頃からバケツをまかしたような降りかたに、過去の羽越水害を思い出しまんじりともできずに朝を迎えた。

早朝出勤に当たっていた息子は、タクシーもバスもこないのゴム長靴をはき自宅から勤務先の中郵便局まで走って着いた。途中の粟の木川は、河川敷まで水が上り、道路は池のようで動けない車があちらこちらに見えたという。

山木戸2丁目にあるわが家は、牡丹山・竹尾線のバス通りに面していてこの路線の両側は、高いので浸水の心配はないが、裏通りに入ると低いので少しの雨でも浸水騒ぎになっている。

深夜放送からずっとラジオをつけていたが、刻々浸水の被害が増え、地区内の木戸小学校、東新潟中学校が避難所に指定された。また、紫竹排水機場のポンプが動かず、被害を大きくさせたこともわかった。

便利な都市生活の「死角」が災害で次々に見えてくる現実に背筋が寒くなる思いで聞いていた。

このようなとき、正確な情報そしてわかりやく臨場感ある情報を得ることは安心につながり、市民生活には、最も大切なことと思った。

わが隣組10軒のうち、床上浸水で畳を上げた家は1軒、2軒は床下の貯蔵庫に水が入った程度だった。

近くの自動車学校の練習場はまるで湖のようであり、また表通りから一步入ると道は池のようになっている。

輸番で組長であるわが夫は、小路、十路に“通行止め”と書いたロープを張り、近所の自治会の役員と水が引く夕方まで見張り番をする。

後日わかったが、浸水地域に住む高齢の独り暮らしの知人は、午前6時頃畳が流れていったが仕方がないので、そのままにして親戚へ避難したという。



通行止めの様子(新潟市藤見町)

このような高齢者や病人それに障害者などへの対応のしかた、“被災者にとって何が必要か”を汲み取ることのできるまちづくりが必要でないかと痛切に感じた。

明治19年の観測以来最大の豪雨だったから浸水は仕方がなかったというものの家屋の復旧などで被災世帯に多大な出費を強いた今回の被害、市民の暮らしを守れなかった行政のあり方も忘れてはならない。

“天災は忘れた頃にやってくる”とかつて寺田寅彦は言った。

この事実をどう受け止め、今後の雄鎌にどう反映させるのか。市民として見守り、提言していきたい。

山田 淑子

## 水害の再来 都市型水害を考える

## 1.大河津分水の光と影

大河津分水が現在の姿として完成したのは昭和6(1931)年6月であった。

新潟平野を信濃川の洪水から開放した大河津分水がついて、「洪水による被害は、慶長11(1606)年の江戸時代から明治の末期(1912)まで実に100回以上におよび、約3年に1回の氾濫を繰り返したことになるが、この記録に残らない水害はまだ多くあるものと推定され、その歴史は水害そのものであった」(別冊1億人の昭和史・新潟県の昭和史・毎日新聞社)と書かれている。

私は手元の「新潟市史・資料編12自然」の別冊「新潟市災害年表」からこの事実と、さらにその後の水害の様相を追ってみた。この年表は新潟気象台が統計を始めた明治19(1886)年から平成元年(1989)年の103年間、新潟市に直接被害を及ぼした風水害・雪害・地震・冷害・干害・火災を年代順に取り上げたものである。

明治19(1886)年から大河津分水の完成した昭和6(1931)年までの45年間、記録された洪水・水害は実に10回、4・5年に1回であり、この中には今も語り継がれる「木津切れ・横田切れ(明治29(1896)年)」、「木津切れ(大正2(1913)年)」、「曾川切れ(大正6(1917)年)」がある。

大河津分水完成以降、年表に床上浸水の水害記録が出るのは、先の「曾川切れ(大正6(1917)年)」から28年も経った昭和20(1945)年9月の枕崎台風による床上2棟、床下16棟の浸水である。続いて床上浸水の記録の出る水害は昭和22(1947)年7月の洪水780戸、昭和23(1948)年9月のアイオン台風12戸となり、その後、水害が記録されるまで10年を経過する。こうして大河津分水は洪水の恐ろしさを忘れさせた。同時に水との関わり、水の恩恵も忘れさせた。

## 2.新たな水害—地盤沈下のツケ

10年後の水害は、昭和33(1958)年6月の雨だった。「27日から降り始めた雨は、28日夜半の一時的強雨のため、栗ノ木川・大川運河が増水し、末広通、東大山町一帯約50戸が床下浸水した」続いて8月27日に床下82戸床上3戸の浸水。12月12日下木戸地内通船川堤防、

かもめ橋から上流50mで約300mが溢水、10mにわたって破堤し水田約50haが20cmの深さで浸水。12月28～29日山の下末広通、目の出町1～3丁目、東新町などに床上5戸、床下170戸の浸水被害と続き、昭和34(1959)年は7・8・9月に床上・床下浸水、水田・畑の冠水など大きな被害が出た。さらに昭和35(1960)年7月、昭和36(1960)年6月、昭和38(1963)年8月と水害が続発したが、徹底的に新潟市民を恐怖に陥れたのが昭和39(1964)年6月16日の新潟地震であった。市民は地震災害とは別に長い浸水で苦しめられた水害でもあった。

昭和30年代、急激になった地盤沈下が新たな水害を発生させたのだった。

地球の表面積は7割が水域で、「水の惑星」といわれるように水は大きな役割を担っている。その水は海、河川、地下水となって蓄えられ、一部は蒸発し雨となって再び地球に降り注ぐ。この水循環が、全ての生物の命を支えてきた地球の長い歴史であった。しかし今、その水循環を断ち切る行為が、思いもよらなかったツケとして現れていると指摘されるようになった。



ガード下が冠水(新潟市月見町)

新潟は地盤沈下によって、川や堀の水が流れず雨で溢れるようになった、時は舟運から自動車に変わる時代、下水道は近代的な都市への絶好な機会(とあって)、川や堀を埋め立て、代わりに下水管を敷設し道路に変えていった。それは、大事な水循環を断ち切るものでもあった。

もともと下水道は、し尿を日本のように肥料として使う習慣のないヨーロッパで生まれた技術である。戦後の日本は先進国並にと下水道の建設をはじめ

めた。寄生虫追放の意義はあったが、雨水もまた汚水と同じ厄介なものにした。雨に頼らぬとも良い水質の豊富な地下水や河川があったからである。しかも、経済性、効率化を図るため、処理場の大型化、処理対象面積の広域化から、下水管は長い道のりを経るものになっていった。

新潟もその例に洩れることはなかったし、当時、すでに批判のあった混合式でスタートしたのである。

### 3. し尿と同じでいいのか

雨水は地下に浸透する間も与えられず、下水管に流しこまれるシステムができてしまった。下水道の普及した都会では、地下水が失われ熱帯夜の増加、さらに、下水管から溢れる雨水で新たな「都市型洪水」を生み出すに至った。その対策の一つが、巨大な地下水槽を造って一時的に貯留するものだった。このような先進都市の経験が反映されず、普及率を上げるための新潟市の下水道建設に、基本姿勢が変わる兆しはない。

8・4水害で「記録的な雨量だった。これを処理する費用は莫大で不可能」といった市の高官は批判を浴びてしまった。大した雨でもないのに常習的に浸水する地帯、そのような浸水地帯が広がっているという危惧、どうするのか、なにも答えはない。まかない切れない雨水は、地下水槽で乗り切る計画だが、これこそ現在の下水道計画が破綻していることの証拠で、現行計画の見直しが求められているといえよう。

加えて、今回の浸水を大きくした要因でもあるポンプの停止事故は、未だに原因が分からず今後も起こるであろう不安も払拭できず、雨が降るたびに浸水を心配する市民が増えている。地盤沈下を克服し近代的な都市に変えてきた(と思った)結果の水害。増水や破堤する危険な川や堀は姿を消し、さらに関屋分水路の完成(昭和47(1972)年)。市民の多くは海面下に住みながらも、張りめぐらされた下水管と処理場で万全が期されると信じている。だからこそポンプアップの要求や集水枡の増設を求める。

同じ雨量でも、都市化が進むほど下水道に流入する量は増えていく。雨水はいつときも早く下水に流す汚水対策から、先進県や外国などの教訓も学び、根本から問い直す時期がきたのでないか。また、財政的にも環境の問題からも、いろんな批判、見直しが提起されている下水道。海面下の都市新潟の市民、行政の

大きな課題でないだろうか、



藤見変電所 排水の様子(新潟市藤見町)

### 4. わたしの感想

新潟は、海面下の町でポンプアップでしか排水の手段がない。下水処理場では雨も全てポンプに頼る。雨だけが信濃川や海に自然流下することはできない。し尿などは水量の変動は少なく管理し易いが、雨は予測が困難、かう変動が大きく、またし尿のような処理が必要でなく、処理せず放流することも可能である。また、環境の面からも。し尿と次元が異なる。とすれば、これらを一括して管理すること事態が本来おかしいのでないか。

1. 雨水は、し尿・家庭雑排水の下水道から切り離し、単独の次元で考えたい。

2. 雨水専用の排水施設を多くし、各施設の負担を少なくして事故の危険を分散したい。

3. 現行の下水道事業を無批判にして、優先整備すべき社会基盤施設というべきでない。

4. もし、通船川・(新)栗ノ木川がなかったら。もし、栗ノ木川や堀が埋められずにいたら、現在の水害はどのようになったらだろうか。

都市の河川や堀を放水路や下水管の代用としてみて来たツケが回ってきたのではないか。など考えて見たい。

丸山 芳

## 「くつがプカプカ」

夜中にふと目が覚めた。雨の音で起きたのか、最近よく夜中に目が覚めことがある。雨足が強くなったり、弱くなったりを聞きながら、眠っていたようだ。

朝起きても先ず外を見る。雨はシトシトまだ止んでいない。玄関の外はいつもより多い水の流れ、私の家は地盤が低いので大雨が降ると、家の前が時々川になる。長靴が役にたたない水の量になっていた。今でも時々あるのでさほど心配せずに朝ご飯の後片付けをしていたら、おばあちゃんが玄関で呼んでいる。行ってみると、水がじわりじわりとにじみ込んでいた。二人で困っていた。でも雨が止んだし、後は水が引けるものと思い、台所に戻った。ところが、雨はバケツをひっくりがえしたように降りだした。エ、エッ!!と思えばわてて玄関へ行くと、くつがプカリ、プカリと浮きはじめていた。先ずくつをひっぱり上げ、次は畳をあげと思いきやとても重くてできない。浸水を防ぐには、玄関のあがりにバスタオルで堤防を作ることだけでした。もう少しすれすれでのところで雨が止んでくれてホッと安心し、自分の判断力の悪さに愕然とした。

翌日もまだ道が川に変わっていて通れないところがところどころ、どころ…、やっよの思いで仕事先にたどりついたが、掃りもまだ水が引いていないところがあり、ポンプで水を出していた。私の住んでいる曾野木地区の川になった道路は、水が引けるのに2、3日位かかったのではと思っている。

この様な体験をして、水の恩恵を充分に受けている私の大好きな新潟は、0メートル地帯である。水害もおこりうる水の町に住んでいることを絶対に忘れてはならないと心に刻み込みました。

鈴木 順子

## 「公民館の電話はパニック」

8・4の水害いうと朝の通勤の苦勞が思い出される。住まいは小針、国道116号沿いにある。時折、雨が降ると我が家の前の国道は、地形上の関係で道路に水が溜まることある。車は水しぶきをあげながら走り、渋滞することが多い。

その日の朝、前日の夜から雨で道は渋滞していた。いつもより早起きし、テレビのニュースを見ながら通勤の準備を手早にし、夫に途中まで送ってくれるように拝み倒し、娘とともに家を出る。小針十字路を過ぎると、パトカーが出動し国道116号が通行止めを伝えていた。進路変更し、国道402号を走る。関屋信濃町から国道116号へ出るとまだ通行止め、しかたなく関屋田町へ、いつも水が上がる場所であるその地区は、もう30センチくらい水が上がっていた。白山浦の電車通りから市役所前まで走り、バスに乗り換える。バスの中は、床が濡れている。長い時間、水の中を走っていたためかブレーキを踏むとガタガタ、キーンという音がして不安になる。でも道路はすいていて快適。万代シテイ付近は10cmの冠水、昨年できた万代クロッシングは水が入り、溢れているだろうと思っていた。



裸足で通勤する人(新潟市新光町)

そこからがバスは大渋滞。後で聞いた話だが、明石通りは浸水のため車が浮き通行止めになっていた。先を急ぐためバスから降り、歩く。それからが私にとって水との戦い。

万代通りは膝下まで水につかり、スカートをまくりこざいて歩く、格好などいってられない。人々は歩く、歩く。日本人の真面目さを垣間見た。あなたは立派!感心!

蒲原町に着くと浸水していない普段と変わらぬ街並みにホッと、公民館に着く。地区事務所の職員が出勤し、水害の対応をしていた。

「呼び出されて来たが、日の出町にある自宅も浸水しているだろう。もう駄目だ。」という職員、「交通機関が混乱しているので、他の職員が出勤できないかも知れないので早く来た。」「水害でこんな経験は初めて」などの声が聞こえた。分館の木戸公民館、大形公民館の様子を電話で聞き、何かあったら連絡するように話し中央公民館に様子を報告する。電話が鳴り始め、一人でてんでこ舞い、グループの休みの連絡、市民から避難所の問い合わせなど、そんな中、通船川のことが心配になり、星島さんに電話し、木戸地区の様子を聞き、通船川の状況を見てくれるように頼み、電話の応対する。

この水害で思うことは、もっと早く市民に情報があれば通勤の足が確保されるし、混乱が緩和されるだろう。家は高床式、公園など水の溜まる場所(遊水地)があれば良い。

大崎 信子

### 鳥屋野潟は50万都市のダム くい止めた水害拡大

8月3日の夜半より降りだした雨は新潟市の観測史上最高の降雨量となり、多くの新潟市民が水害により被災した。バケツをひっくり返したような雨とはこの事で、これにより被災された方々には心よりお見舞い申し上げます。私自身も、家が鳥屋野潟のすぐそばにあるためあふれた水のため敷地の半分位が冠水した。この水が引いたのは8月4日の夜半であった。

また、勤務先の駅前の専門学校学校も一部水に浸かった。私は歩いて出勤したのであるが、新潟駅の南側はケヤキ通りが冠水し膝の上まで水位が上がり乗用車が何台か立ち往生し、中には乗り捨ててある車が目に付いた。同じように明石通りも水につかり大渋滞して交通機能がほとんどマヒしてしまった。

鳥屋野潟は満水状態で、その周辺は至る所で道路が寸断して水をかぶっていた。都市緑化フェアの会場も一部水に浸かり、カナルから水があふれ鳥屋野潟に流れ込んでいた。

この災害で新潟市の多くの場所が海拔0メートル地帯であるということにいやというほど気づかされた。鳥屋野潟の水面は通常では海拔マイナス1.5メートルに維持されている。日本海の高さはプラス0.5メートルであるからつごう2メートルほど海水面より低い。新潟市は本来オランダと同じような海面下の低地であるといえる。それが維持されているのは、多くのポンプ場により排水しているからである。

じっさい普段見慣れた鳥屋野潟に比べるとひと周りもふた周りも水面が広がって見えた。一面の芦原が水に浸かり、本来の鳥屋野潟はこんなに大きいものかと驚かされた。今回の洪水での鳥屋野潟の水面が何もしないときの本来の鳥屋野潟の姿なのだろう。

今回の水害を通じて「亀田郷」の遊水池としての鳥屋野潟の役割をつくづく考えさせられた。「亀田郷」とは阿賀野川、小阿賀野川、信濃川に囲まれた地帯をいい、古くはたびたび洪水による被害を被った輪中地帯である。この地域で降った雨はほとんどが鳥屋野潟に集まる。その意味で鳥屋野潟は降雨の一時的な退避場になっている。ここから親松の排水機場でポンプアップして信濃川に排水しているのである。

鳥屋野潟があったおかげで今回も被害が食い止められた事は間違いない。一見無駄に見えるような空間でも非常時では大きな機能を果たすのである。過去に鳥屋野潟を埋め立てる計画があったが、そうならなかったら今回の被害は間違いなくもっと拡大したであろう。鳥屋野潟は新潟市に残された貴重な自然であるとともに、我々の生活を守る機能を持つ場所なのである。今回の教訓としていえるのは、公共面では排水ポンプの機能に余裕を持たせること、さらに非常時の遊水池として潟や水田の役割を再評価することが重要だと思われる。

私たちは新潟というかつて低湿地だった所に住んでいる。そのことを肝に銘じ生活しなければならぬと思う。

(平成10年8月11日・新潟日報夕刊より)  
水辺の会世話人 五十嵐 実

### 「8・4水害被害山木戸の様子」

旧7号線の国道橋から赤道交差点までの山木戸3、4、6、7、8丁目付近。地区でいうと牡丹山線(バス路線)から日石グラウンドまでの旧7号線を挟む一帯の特に中間付近で80cmほどの水が出た。床上浸水の家が多く、畳、家電品、風呂釜、自動車などに大きな被害を受けた。また、基礎の高い家でも床下に水が溜まり2日も3日も排水ポンプで水を出していた。

あの水の中、地元の人を制止するのを無視して通行する車が多く床下浸水だったのに波で畳がぬれたりシャッターを壊された家も多く出た。

排水機場の場所の関係からか、水の引くのがほかの地域より遅かったように感じる。

私の店(酒店経営)のお客様の中には平屋作りの家のため寝る事が出来ず、ビールの箱を借りて行って床板の上に置きベッドの代わりにして生活していた方もいた。

山田 隆志

### 「水害を食い物にする死の商人 ・畳屋さん繁盛記?」

あの水害のあと逢う人毎に「畳屋さんは儲かったでしょ?」といわれます。いちいち言い訳染みだすことを言っても面倒なので「水害を食い物にする死の商人」とでも自称しようかと思ったくらい。確かに需要はありましたが、痩せるほど働いたんですよ。

8月の始めですから、ちょうどお盆前の繁忙期で13日頃までの日程のやりくりができてさあがんばろうと思っていた矢先の出来事で、4、5日はどこをどう回っていたのか覚えていないくらいの忙しさでした。水を含んで100kgにもなる畳の始末を手伝ったり家具の移動のお手伝いをしたり、応急の対策のご相談に乗った

り。とにかく復旧してお客様が通常の生活を少しでも早く出来るようにと願って、駆け回った一月半でした。私の店で、20軒あまりのお客様のお宅の畳、約250畳ほどを入れ替えました。

新潟市全体では7、8千畳くらいの被害があったのではないのでしょうか。これで畳の入れ替え5回目だよというお宅、そんなに低いところじゃないのに一時的に急に水が出て間にあわなかったという方、今までこんなことなかったのに近くで宅地造成したために水がはいったんだよというお宅などなど、いろいろでした。

浅井 敬一

### 低平地河川の治水対策

#### 1.低平地河川の一般的特徴

- a: 沖積平野の河口部を流れている。
- b: 水位が周辺の地盤高よりも高い「天井川」(てんじょうがわ)となっていることが多い。
- c: 川の周辺は、地盤が低く地下水位が高いので、地下に溜まる水の量(地下貯溜能力)が小さい。
- d: 洪水時には、ポンプなどで強制的に排水している。
- e: 川の周辺には、大都市が形成されており、人口や資産が高度に集積されており、洪水や内水氾濫の被害額が甚大である。(日本では、低平地の氾濫域に人口の50%、総資産の70%が集積している)
- f: 土地が高度に利用されており、川や掘が埋められ、川幅が狭められている。(水の逃げ場が無い)
- g: 周辺部が開発されて緑が少なく、舗装や屋根の占める面積が大きいので、雨の大部分が川や低い場所に流れ込む(流出率が高い)

#### 2.都市河川の治水対策の基本

堤防が被れて洪水になるような場合は、高く



て丈夫な堤防を作れば、洪水は防げるが都市河川の治水対策は、川だけを対象として解決できる問題ではない。

例えば、前項のa.b.c.などは地形的な特徴であって、人間の力では解決できないし、その他の項目も解決が困難で、膨大な財政投資が必要である。

したがって、都市河川の治水対策の基本は、「被害を最小限に抑えるための、ソフトを含む総合的な治水対策」ということになる。

### 3.具体的な対策

#### ①降った雨をゆっくりと流出させる対策(流出量の抑制)

- a: 流域内に木を植える……公共用地や家の庭(貯溜量の増大、蒸散量の増大)
- b: 透水性舗装、浸透柵、家庭内浸透装置などの設置(貯溜量の増大)
- c: 下水道管内に水を溜める(管内貯溜)
- d: 川に水を溜める(河道内貯溜)
- e: 市街化調整区域の確保と、開発規制
- f: 防災調整池の整備の徹底

#### ②流出した水を、被害が無いか少ない場所に溜める対策(河道流量の制御)

- a: 公園、グランド、駐車場などを遊水池にする。(多目的遊水池)
- b: 湖、池などの貯溜能力を大きくする。
- c: 農地の遊水池としての活用(被害の補償制度の確立)

#### ③被害を最小限にとどめる対策

- a: 浸水予想区域の公表
- b: 降雨、洪水、浸水情報の伝達
- c: 避難、誘導体制の整備
- d: 交通規制の徹底
- e: 水に強いライフラインの開発

f: 水に強い建築物の開発

g: 水に強いライフラインの整備

h: 排水機能の増強

### 4.治水対策の考え方を考えよう

自然が人間の生活に与える悪い影響を取り除いて、一方的にその利益だけを受けようとする、結果的に人間の生存基盤そのものが失われることになる。地球の温暖化や環境ホルモンの汚染が、地球規模の問題として提起されているが、都市の内水氾濫の問題も、基本的にはこのような範疇に属している問題と言えらう。

今、日本の川は、ある確率で起こる洪水にたいして、背後の土地利用の状況に関係なく同じ安全度が確保されるように整備されている。これは、川の長さが短く、急勾配であるという地形的な条件からやむを得ない面を持つてはいるが、根底に、自然を力でねじ伏せようという過信があるのでばなだろうか。地球温暖化の影響であろうか、最近では100mm/hなどという極地的な豪雨記録を耳にしても、驚かないような状況になっている。このような、豪雨でも洪水が起らないように、今の考え方で川を整備するとしたら膨大な公共投資額とり、国民の財政負担能力をはるかに越えることは明らかである。これからの治水事業は、絶対的な安全確保ではなく、できる限り被害を少なくするという方向に転換せざるを得ないのではなからうか。ここまでは総論であり、さしたる異論の無いところであろう。このような考え方で川の整備をやるということは、具体的には、左岸と右岸の堤防の高さが変わることであり、農村部と都市部で治水の安全度に格差が生じるということなのである。

こうなると、議論百出、憲法論議にまで発展して合意形成どころではないというのが、わが国の現状ではないだろうか。しかし、中国では

歴史的にこのような治水対策が踏襲されてきたし、ヨーロッパでも背後地の資産価値や生産額などを評価して、治水の安全度を変えて河川整備を行っている事例がある。(農村部の災害額を都市部の市民が補償する)昔、日本人は洪水や自然災害と上手に付き合う知恵を持っていた。(水害防備林やかすみ堤など)先人たちの自然との付き合い方に学び、具体的な議論を始める時ではなからうか。

### 5. 田んぼ調整池構想

8月の豪雨災害では、収穫前の多くの水田が長期にわたって水没した。倒伏して、収穫を失ったイネを処分する時の空しさや悲しさは、そのイネを育てた者にしか分からない、行き場のない鬱積された怒りを伴った悲しみなのである。農業共済制度があり、いくらかの損失保障が得られるが、満足すべき補償額ではない。水田に堪水したということは、治水上から考えれば洪水を調節したということである。水田の洪水調節能力に相応した、治水事業費の還元システムを作ることを検討してもよいのではなからうか。新潟県の減反面積は、全水田面積の約30%4万haを超えている。(食糧の自給率が40%程度なのに、1/3もの田園がいないという理屈はどうも理解できないが)乱暴な試算をすれば、4万haの水田に1mの深さに水が堪ったとすれば、4億 $m^3$ の貯水量となる。これは、2千万 $m^3$ 程度の洪水調節容量をもつ治水ダム(信濃川支流三国川ダム程度)の実に20基分の量に相当する。土地が高度に利用されて、遊水池のスペースを得にくい都市近郊の水田を手始めに、遊水池機能を持たせた「田んぼ調整池」「多目的水田」の整備を検討する必要があるのではなからうか。

### 6. 「通船川を埋めてもいいろっか」

答えは「通船川を埋めるなんて、とんでもない話らこてね」である。

#### 理由

1. 河道内の貯溜機能を高めるといふ、目的物がなくなってしまう。
2. 地震などの災害時の防災機能が失われる。
3. 舟運による交通対策の母体がなくなる。
4. 生物の生息環境が失われ、市民と川のふれあいの場がなくなる。

石月 升

## 「8・4水害を考える」

### ■8・4梅雨前線豪雨災害状況報告

#### ・降雨状況

新潟県下越地方では、8月4日未明から梅雨前線の活発化により、新潟市を中心に落雷を伴う激しい豪雨に見舞われた。特に大きな被害を受けた新潟市では、60分最大97mmの雨が降り、新潟気象台観測史上最高の日雨量265mmを観測する記録的な豪雨となった。また、今回の豪雨は、午前2時から5時までの3時間で144mmに達し、午前0時から12時までの12時間にそのほとんどが降る短時間集中型の雨であった。

#### ・被害状況

今回の水害では、低平地で短時間に集中して降った雨のため降り始めから被害の発生までの時間が短く広範囲にわたって多くの家屋浸水や道路・農地等の湛水被害が発生した。新潟土木管内では、新潟市市街地を中心に床上浸水1597戸、床下浸水9458戸の浸水被害が発生したほか道路や農地で多くの湛水被害を生じるとともに、市街地での浸水が朝の通勤・通学の時間帯と重なったことから、新潟市全域において交通の混乱を招き生産活動にも著しい影響を及ぼした。

## ■8・4梅雨前線豪雨災害状況報告

新潟地域は、信濃川と阿賀野川の洪水によって形成された沖積地であり、砂丘、低湿地、潟に大別することが出来る。

新潟市周辺では、昭和30年頃より天然ガス採取のため地下水汲み上げによる地盤沈下が進んだこともあり、海抜0メートル地帯が各地に存在し、通船川、栗ノ木川、鳥屋野潟、西川、新井郷川でポンプによる強制排水を行っている。



通船川を見回る警察官(新潟市藤見町)

8月4日から降り始めた雨は、新潟地方気象台始まって以来最高の60分最大97mm、日雨量265mmを観測する記録的な豪雨であった。このため、各排水機場は、フル運転で排水したところであるが、新潟土木事務所管内では、床上浸水1597戸、床下浸水9458戸と広範囲にわたって湛水被害が発生した。県では、この災害対策にあたり、国、市と一体となり、通船川・栗ノ木川、鳥屋野潟、福島潟放水路の各河川において激甚災害対策特別緊急事業等の導入を図り、5ヶ年で概成を図る予定である。また西川においては緊急的な災害対策事業の導入を検討している。今回の集中豪雨から学ぶべきことは多々あったと思う。近年、通船川・栗ノ木川流域では開発が進み特に都市化の進展、生産活動の拡大が進んでいる現況にある。このような状況に対処するためには基盤インフラの根幹を担う治水施設の整備を促進するとともに洪水流出増を極

力抑制し、河川流域の持つべき保水、遊水機能の維持に努めることがより重要なこととなってきている。

また、洪水氾濫の恐れのある区域に対しては治水施設の整備状況に応じて水害に安全な土地利用方式や、洪水時における警戒避難態勢など総合的な治水対策を検討する必要がある。こうした観点から諸課題を整理をしてみると

1. 河川流域の持つべき保水、遊水機能を設定し、その機能確保の検討。
2. 洪水氾濫予想区域の検討。
3. 水害に対して安全な土地利用方式及び建築方式の検討。
4. 出水時の各種情報を流域住民へ速やかに伝達するシステム構築の検討。
5. 水防活動の強化充実。
6. 湛水に対する交通管理システム及び防災道路確保の検討。

等が考えられる。またこれらの諸施策の検討を進めるには、下水道分野等の各機関と密接な調整を図り、流域レベルでの広い視野を持ち、住民と行政が一体となって考えていく必要がある。



停電の復旧に十日町市からも応援に駆けつけた(新潟市藤見町)

新潟県新潟土木事務所計画調整課長  
平澤 修爾

## 8・4集中豪雨水害と今後の対応

### ■9月11日・新潟市長定例記者会見より

8月4日の集中豪雨に際しては、降り始めから午後3時までの15時間に265ミリという豪雨が降った。市内全域で被害が発生し、拠点都市新潟の都市機能が大きく混乱した災害であった。住宅の被害は、床上浸水約1,500戸、床下浸水約8,300戸におよび道路の冠水も市内全域で発生した。農作物も水田と畑で約120haが冠水し、ねぎなどの畑作物に大きな被害があった。改めて、被害を受けられた皆様に心からお見舞いを申し上げます。

新潟市は、河口部にあつて低地が多く、海拔0メートル地帯を多く抱えていることからポンプによる機械排水によって、日常生活が維持できている都市である。加えて、近年の市街地の進展により、建物や舗装面も増加し、降った雨が地下へ浸透しにくくなってきている。このため、新潟市は公衆衛生の観点からのみならず、防災の観点からも下水道の整備を市の最重要課題の一つとして取り組んでおり、毎年約250億円にのぼる事業費を投入し続けている。これは、全国平均を5割上回るペースで、下水道普及卒を向上させてきたことになる。また、新潟島に現在施工中である東堀などの大口径の雨水専用管渠網に代表されるように雨水の排水対策にも大変力を入れてきたところである。

このたびの災害を教訓に、さらに排水能力をはじめとした都市の防災能力を向上させるべく、緊急的なもの、および、恒久的なものの両面から、対策を構築すべく考えているところである。まず、緊急的な対策として、被害が特に大きかった大堀幹線周辺の坂井輪地区、木戸地区、本庁地区の関南町周辺の地域3カ所で、雨水緊急対策整備計画を策定する作業に入る。これらの地区では、排水ポンプの増強・雨水貯留管の優先整備・幹線管渠の接続構造の改良などの対

策が必要となると考えているが、9月議会にこのための調査費を3,000万円計上し、より効果的な方法を早急に検討することとする。また、入船地区、山の下地区、船江町地区などをはじめとして、市内各所で排水ポンプ、透水性舗装、側溝改善、貯留池の整備を検討していく。

恒久的なものとしては、新潟島の関新ポンプ場の整備をはじめ、雨水改善管渠の完成を急ぎ、また、計画中の排水能力1時間あたり13万3千トンを超える大規模な新下山ポンプ場の着工を急ぐなど、鋭意努力をしていく。



集水口に集まったゴミ(新潟市R116)

国や県に対しては、鳥屋野潟や通船川、西川の各排水機場の能力増強などや、福島潟放水路の促進などの早期整備と併せて、市街地における下水道の整備目標水準の向上とこれに伴う補助事業の充実などについて、現地視察の際や、後日、上京し直接建設大臣にお願いしてきた。早速、10月9日に河川激甚災害対策特別緊急事業等に採択されたことから、一日も早い完成をお願いするものである。

また、庁内に、新潟市集中豪雨対策検討委員会を発足させ、全庁を挙げて、恒久的対策と緊急的措置について検討することとした。

検討委員会は、防災対策検討部会と雨水対策検討部会の2つの部会をもって構成する。防災対策検討部会は、防災・福祉・清掃・道路・消防などの所管からなり、雨水対策検討部会は、農林・土木・下水などの所管で構成する。防災対策検討部会では、情報の収集と伝達・避難所の緊急開設・ごみの収集・交通規制などを担当する。雨水対策検討部会では国に要望した河川や排水能力の向上・下水道の整備やポンプ場の新設・浸透性貯留池の設置・農作物の被害に対応する農道や用排水路の整備などを担当する。検討委員会に、市民の皆様にご協力いただく事柄も含め、総合的・体系的に検討するよう指示をした。検討委員会で、早急に調査・検討し対策を立案し、できるものから来年度の予算に反映させていく考えである。



冠水部を通過しようとして浸水した車と排水の様子  
(新潟市川岸町)

災害は、人命や健康、財産、経済活動に大きな被害を与える重大事件である。新潟市としても、福祉、文化、環境など市民サービスの向上を目指すことに加え、地震・火災・風水害・大事故など、災害種別に、それぞれ対応した対策をさらに充実させ、安心して住めるまちづくりを目指して努力していきたいと考えている。

### 8月4日の集中豪雨で住民が 受けた被害レポート

1. 新潟市山木戸: 木村さん「床上浸水。玄関前にコイが泳いでいた。午後3時水が引いた」
2. 新潟市山木戸: 坂井製粉さん「工場が床上浸水。製品、原材料が水浸し。4トン車2台分を廃棄処分」



水に浸った製粉類

3. 新潟市中山: 坂井さん「車が通るたびに強い波でシャッターを壊し、そのまま走り去って行く」
4. 新潟市中山: 三原さん「クーラーの屋外機が車の波で壊された。これは人災だ」
5. 新潟市中山: 農家の方「水没しやすく農地に適さない、収穫の少ない所に住宅が立ったからねえ」
6. 新潟市中山: 小林さん「下水道の落ち口にビニールが詰まり水圧で水が吹き上げていた」

### 聞き取り調査の結果「今後の自衛について私の提案」

1. 0メートル地帯の意識が無く経験の無い集中豪雨に自己防衛が出来なかった。
2. 雨水中に車を走らせ、周囲に被害を与え、その事に気付かず自身の車も水被害を被った。
3. ごみ(特にビニール類)がマンホールの取水口を次々と塞ぎ、引き水を遅らせた。

この3点を自治会単位で話し合い組織的な取り組みを研究すべきではないか。(昔は各所に防水用具置き場があった)各自治会に防火・防犯組織があるのに防水組織が無い。0メートル地帯では行政任せは緊急時に役立たない。

水辺の会世話人 星島 卓美

### 土地改良施設の役割

去る8月4日、最大時間雨量85mm、累積雨量14時間で318mmの記録的な集中豪雨が亀田郷地区を襲いました。農地の被害としては、水田で、亀田郷ほぼ全域にあたる4,214haが湛水、また、ハウス施設をはじめ転作農地を中心に約465haで冠水被害が出ました。野菜類を中心に相当な被害を受けました。

現在、水利施設総合管理システムモデル事業で構築したコンピュータ集中管理システムにより、親松排水機場(60t/s)を中心とし、二本木(6.84t/s)、蔵岡(12.8t/s)、本所(16.2t/s)の3排水機場を連携させて、効率的に運転することが可能となっています。このシステムにより、平成7年8月の最大時間雨量40mm、降り始めから24時間の雨量が254mmの集中豪雨に対して、被害を最小限に抑えることができました。今回の8・4水害に対しても、この経験を活かしながら、全機場フル稼働で対応しました。鳥屋野湯の遊水池としての役割を利用しながら、通常時の主要排水機場で農業用施設としての親松排水機場は、自らの能力の限界に挑戦するがごとく、うなりをあげて必死で排水しておりました。さらに、亀田郷の東部一帯の排水を途中ゲートカットして、栗ノ木川・鳥屋野湯に流さず、二本木・本所・蔵岡の3排水機場により、流域を変更して阿賀野川・小阿賀野川に排水しました。

これは、一極集中を避けることにより、親松排水機場への負担軽減であると同時に、鳥屋野湯・栗ノ木川周辺部への被害の集中を避ける、危険の分散でもあるわけです。前述したように、これは記録的な豪雨であり、現在の施設の条件のもとで、構築されたシステムを最大限に活かしたということをご理解いただきたいと思います。この措置をとらずに、親松一極で対応しようとした場合、下流部をはじめとし流域の被害は、計り知れないほど大きなものになっていたということです。農地の遊水池としての役割が、都市の被害を軽減したという捉え方もできると思います。これに対し行政の側でも、親松排水機場の増設・更新が加速的に推進されることが決まりました。すなわち、建設省は毎秒40tの増強計画を、農水省は現在の老朽化した毎秒60tの農業用排水施設を全面的に更新す

るための調査を、来年度から行うべく予算要求を行っています。

通船川に関しても、亀田郷11,154haの内、親松排水機場の排水区域が10,016haですから、残りの1,138ha、全郷の約10%が通船川排水区ということになりますので、亀田郷にとってもまた、都市化の中で非常に重要な河川であると言えます。もしも埋め立てるといようなことになれば、河川の遊水池としての役割、環境・生態系に与える影響などが心配されると同時に、新たな排水体系の構築が必要となり、そのための基盤整備事業も必要になってきます。



冠水の状況を見る貯木場関係者(新潟市:通船川第二貯木場)

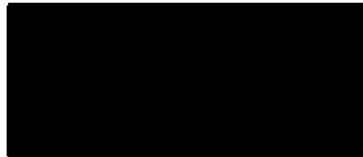
かつてより亀田郷は、上流と下流、高地と低地、それぞれ条件の違う地域がともに同じ水系の中で共存してきました。水争いの絶えない水利条件の中で、全郷統一的な排水体制の構築を目指し、互いに利害を超えて、亀田郷水害予防組合、さらに亀田郷耕地整理組合から亀田郷土地改良区へと、協力体制を作り上げてきたのです。

現在、亀田郷は25万人以上の居住人口を抱えておりますが、そのほとんどは乾田化後の都市住民です。長い年月をかけて亀田郷の農民が培ってきた協同の精神、痛みを分かち合って水と闘ってきた歴史を、今一度、農家を含めた地域の皆様に、振り返り、思い起こしていただき、これからの亀田郷の治水と利水、都市と農村の共生のあり方を考えていただければ幸いです。

亀田郷土地改良区企画室長  
藤井 大三郎



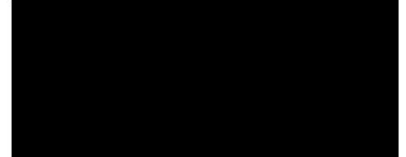
永松 暁



私の出身地は九州福岡です。玄界灘と山々に囲まれ筑紫平野に生を受け、自然の中でのびのびと育ちました。郷土を後にして歯や22年現在44歳。新潟には社命で昨年5月より単身赴任中。新潟の印象は信濃川、阿賀野川と大河が流れ出て、水の都という感じを受けます。自然にみちみちていてそこで育った人たちは大らかで人間味があり、どことなく郷土にいるような錯覚さえ覚え大変過ごしやすいところです。今後ともよろしくお願い致します。



橋本 賢一



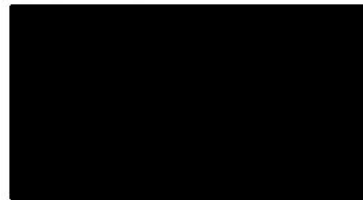
市民団体の活動に興味を持っていたので入会しました。今は大学4年で卒論研究を行っているため、まだほとんど行事に参加していません。何かと暇を見つけて参加したいと思っています。

川の水の流れをボーッと見ていることが好きで気が付くと2、3時間過ぎていたこともあります。ただ見ているのも芸がないので、今度は釣りでも始めようかと思っています。

好きな水辺は阿賀野川中流部(三川・津川・鹿瀬)。雪が降りしきるなかの麒麟山はオススメです。(そのかわり寒い)



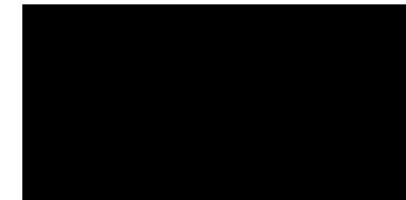
浅見 広人



溪流の水の流れを見ながら釣りをし、又そのせせらぎをバックにお昼寝をすれば、なにも言うことはありません。ちょっと日焼けしますが一度お試しください。のどが乾いても大丈夫、水は目の前を流れていますよ。



池 和芳

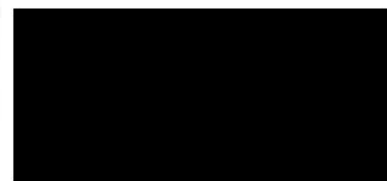


亡父が生まれ育った湿地帯流渦、実験材料の車軸藻求めて池づくり、ウーパールーパーの餌を求めてあちこちの小川でメダカ採り、水辺への懐かしさから入会しました。どうぞよろしくお願いします。



「水源の神を語る会」提唱者  
(左)、世話人(中)と共に私(右)

渡邊 朝美



水源、棚田、ため池、田んぼに魅せられて、川を逆流し、山に行く。植樹・林業体験・自然観察に参加。文化と環境を守り続ける田んぼ、その風景は人と自然がつくる美しさ、歴史の足跡に耳をすまし、21世紀の自然は水と土を実感します。中国の「飲水資源」をふっと聞かされて、目の前が晴れた気がした。雨水を司る神様は米どころ新潟にまちがいなく鎮座し、雨水信仰の足跡が残っているはず。お心当たりの事跡を教えてください。

好きな水辺：角田山から見た蒲原平野、水が張り一番田んぼらしい季節、角田山に登り、朝日が昇る白い空と一面に広がる満みたいな田んぼに朝日が照り輝いた時の美しさは、言葉に言い尽くせないほど素晴らしい。水の新潟なんだと思います。など



和田 浩



新潟の水辺のなかでは、新潟島一周サイクリングロードが好きです。天気の良い休日には信濃川下流の市街地から関屋分水を経て日本海待つ波に至るまでの景色の変化をペダルをこぎながら楽しんでます。

# EVENT INFORMATION

## 水辺の会関連98年活動予定

■98.11.7(土)～8(日)

### 第14回水郷水都全国会議in気仙沼『森は海の恋人』

7日:基調報告小岩氏、畠山氏「リアス式海岸とはなにか〜」

基調講演大熊 孝「21世紀の河川工学」

8日:分科会、エクスカージョン

サンマリン気仙沼ホテル観洋

主催:まちづくり協議会気仙沼21 TEL:0226-24-1221

■98.11.11(水)

### 第2回NPO学習会

新潟の市民活動支援ネットワークのあり方を考える

15:00から

新潟市役所第1分館301 500円

第1部:p m3:00~4:30

「宮城のNPO活動支援ネットワークの実状」

司会:清水義晴/新潟のNPO活動実践者との意見交換

第2部:p m6:00~8:00

「宮城県のNPOに対する取り組み」

司会:相楽治/加藤さんと樋口さんの苦労話と成果を聞く

主催:(仮称)NPOネットワークにいがた

TEL:025-263-2733 相楽、森本、山賀

### ・NPO法施行にかかる県の説明会

98.11.16中越会場長岡財務事務所13:00~15:00

98.11.17上越会場上越財務事務所13:00~15:00

98.11.20下越会場県庁13:00~15:00

TEL:025-285-5511 内2478 松田

### ■98.11.19(木)第3回NPO学習会

~私たちの社会にとってのNPOとは~

18:00~

新潟ユニゾンプラザ 無料

日本NPOセンター常務理事山岡義典さん講演

主催:県民ボランティア運動実行委員会

TEL:025-285-5511 内2478松田、025-263-2733 森本

### ■98.11.20(金)大地の庭シンポジウム

#### 『新潟に緑の種をまこう』

21世紀の都市の緑を展望するシンポジウム

13:00~17:00 新潟ユニゾンプラザ

主催:新潟県 事務局:大地の庭 田辺

TEL:025-287-3753 申し込みFAX025-285-0624

■98.11.21(土)~11.22(日)

### 98エコビジネス展inNiigata

~環境にやさしい企業活動応援します~

10:00~17:00

ミニステージ・体験教室・エコライブ・エコトーク

新潟市産業振興センター 無料

主催:新潟県環境企画課 TEL:025-285-5511 内2692 山本

### ■98.11.21(土)加治川ネット21環境講座

#### C.W.ニコル「人と自然」

18:00から

新潟市民文化会館大ホール 1200円

C.W.ニコル講演会

加治川ネット21 TEL:0254-23-3558 榎本

### ■98.11.23(月)第2回つくりり市民会議

#### (通船川・栗ノ木川下流市民会議)

15:00~17:00

新潟市万代市民会館6階 無料

主催:市民会議

### ■98.11.28(土)~29(日)

#### 第6回新潟市消費生活展

10:00~16:00

NEXT21・市民プラザ 無料

各団体の出展

新潟市消費生活センター TEL:025-228-1000 内2412 清水

### ■98.12.19(土)新潟市都市景観シンポジウム

13:00~18:00

万代市民会館 無料

分科会、全体会、表彰式、祝賀会

新潟市都市計画課・都市景観室 TEL:025-228-1000 内2810

### ■98.12.20(日)

#### 水辺の会忘年会

会場、会費は未定

TEL:025-263-2733 森本

## 編集後記

私は新津市から新潟市中心部まで約20kmの距離を通勤しています。当日、最も困ったことといえば、道路の渋滞です。新津市から新潟市まではいくつかの幹線ルートがありますが、新潟市中心部まで乗り入れが可能なのは堤防の上の道路だけでした。そこには脇道が通行不能になって戻ってくる車も集中したため、3時間半、車の中で過ごしました。

新津市内の自宅の近所では一人暮らしのお年寄りの家が床上浸水したと、帰ってから家族に聞きました。3時間半も車の中で過ごすのであれば、その日は出勤を止めて片付けを手伝うべきだったと心の片隅で後悔しています。

電脳編集委員 杉山 泰彦 sugiyama@on.rim.or.jp

## 書籍紹介

### 『きらめく川たち』一般水系踏破の旅



著者:岡村 直樹 価格:1,700円(税抜)

出版:心交社

●水音弾ける清爽15水系を収録

・四万十川・雄物川・天塩川・多摩川・遠賀川

・天竜川・江の川・利根川・淀川・熊野川・九頭竜川

・脇川・長良川・後志利別川・肝属川

10年前の春、高知県中村市の郊外で四万十川に架かる橋を渡った。橋には欄干がついていず、うっかりすると川面に転げ落ちそう。高知県内では、こうした橋を「沈下橋」と呼んでいる。下校途中なのであろう、2、3人の小学生が自転車のペダルを踏んで、私の脇をすり抜けていった。橋のかたわらには菜の花が群が咲き、風が川を吹き渡るたびに黄色い花が右に左に揺れた。川面は手が届きそうほど近い。青く澄みわたった流れを透かして、川底の小石の一つ一つが粒立って見える。

●事務局 株式会社グリーンシグマ(QZE0677&niftyserve.or.jp)

〒950-2111 新潟市大学南1丁目7821-5

Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134

●編集局 株式会社サザンウインド内(e-mail:masayosi@on.rim.or.jp)

〒951-8134 新潟市関屋1422-10

Phone 025-234-1153 Fax 025-234-1173

●URL <http://www.on.rim.or.jp/~sugiyama/mizube.html>